



今日、僕は、僕の友達の清次郎についてあなたに話そうと思う。後でお話する理由で、僕は清次郎のことをあなたに知って欲しいからだ。

清次郎と僕の関係は、今も友達というより以前に友達だったと言うべきなのかもしれない。僕の中学のクラスメイトだった清次郎は、高校に入学したあとすぐ不登校になって退学すると、そのままいわゆるひきこもりになった。

それ以来音信不通だった清次郎は、その一年後に突然、僕にメールを送ってくるようになった。清次郎は、自分が体験したある奇妙な体験について誰かに話さずにはいられなかったんだ。そう、誰もが自分だけでは受け止めきれない体験を誰かに話さずにはいられない。清次郎は僕にその一部を預けようとしたんだ。でも、僕はそれを受け止めきれなかった。だから、あなたにもこの話をさせて欲しいんだ。だって僕一人では抱えきれないから。あなたが臆病な人間なら、ここでこの話を聴くのを止めてもいい。それは自由だ。

それじゃあ、今から清次郎についての話を始めようと思う。この話を聴いた人間に永遠の呪いあれ、と清次郎は言うだろう……………

両親を殺した

という言葉から清次郎のメールは始まった。最初、僕はそれを信じなかった。引きこもり生活で清次郎は頭がいかれてしまったんだと思った。だから警察に通報したりするなんてことはしなかった。清次郎がその時の様子をすごく生々しく書いていたのを憶えてる。ハンマーで寝ている両親の頭を何発殴ったとか、その時の感触とか、父親が動かなくなるまで二分十二秒、母親が動かなくなるまで一分三十秒、そんなことをこと細かに書いてた。

写真を送ろうか？

清次郎はそのメールの最後にそんなことを書いてよこした。僕はそれを無視した。「馬鹿かコイツ」と僕はわざわざ声に出して言った。正直、恐かったからだ。そのメールに返信することで

、僕は清次郎の共犯になるような気がした。両親を殺したという清次郎の妄想世界に引きずり込まれ、その世界で殺人の共犯者になってしまうような気がしたんだ。だから僕にはどうすることもできなかった。そしてただ単純に、メールを無視した。

その次の日の朝、清次郎から再び送られてきたメールを見つけた。そのタイトルは「写真だよ（^▽^）」、送信時間は深夜三時二十四分で、画像ファイルが添付されていた。

僕はそのメールを開かなかった。そして何も返信しなかった。ここで一つことわっておくと、僕は清次郎のメールに一度も返信していない。清次郎は、決して返信しない僕に対して、一方的にメールを送りつづけた。

気持ち悪かった。でも、本当に気持ち悪いのは、この後起こった出来事だ。そして、僕があなた達に聞いて欲しかったのは、その出来事についてなのだ。

本題に入ろう。長い前置きはこれくらいにして.....

なんか草生えてきたんですけど w w w w w w w w w w w w w w w w

次に送られてきた清次郎のメールは、そんなタイトルで始まっていた。僕はこの時点で清次郎の頭が完全におかしくなったんだと思っていた。清次郎によると、死んだ両親の体から突然草が生えてきたらしい。父親の首の付け根から、そして母親の腰の辺りから、それぞれ突然芽が出てそれが生長していると清次郎は何か楽しいことでも起きたかのような調子でメールに書いていた。

ちよ w w w w w w 増えてる w w w w w w w w w w w w w w w w w

清次郎は「面白すぎる」と言いながら、両親の体に生えた草の数が増えていることを次の日のメールで報告してきた。もちろん僕にとってそれは気持ち悪いだけで、事実だったとしても面白いとは思えなかった。写真が毎回のようにつけられていたが、僕は決してそれを見なかった。頭の狂った清次郎が自分で庭の草でも引っっこ抜いてきて、それを死体の上に乗せているのかもしれない。人の死体なんか見たいわけがない。この時点で警察に通報した方がいいのかもしれないとも考えたが、僕はそうしなかった。清次郎がやっぱり嘘を付いていたら、僕は恥をかくだろうし、万が一清次郎の言うことが本当だったら、僕は清次郎についていろいろ聞かれるだろう。僕は何よりも関わりあいになりたくなかったんだ。

僕は中学時代の友達に、清次郎から変なメールが来てないかそれとなく聞いてみたが、高校生になってから一回も連絡を取っていないとみんなが首を横に振るだけだった。中学の時の清次郎は、たぶん多くの人が普通の奴だという印象を受ける感じだったと思う。特筆すべき部分はない。ごく当たり前のように学校へ通っていた。僕と清次郎は親友というわけではなく、普通の友達の中の一人という感じだった。少なくとも僕にとってはそうだった。だから、なぜ清次郎がこんなメールを僕だけに送ってくるのか分からなかった。清次郎は、僕の事を特別な親友だと思っていたのだろうか。一方的に、僕に深い友情を抱いていたのだろうか。

米が実った w w w w w w w w w w w w w w w w

どう考えてもふざけてるとしか思えないメールが相変わらず続いていた。清次郎は、両親から生えた草はどうやら稲だったようで、それが大きくなって米が実ったと書いていた。「米粒の写

この事件がこれだけで終わってれば、僕が妙な幻覚を見たというだけで済ませられるのかもしれない。でも、そうじゃなかったんだ。僕があなたがたにこの話をせずにはいられなかったのは、これだけでは済まなかったからだ。

それじゃあ、この事件が、そして清次郎がどうなったのか、いよいよこの話の結末を話すことにしよう……………

清次郎が死体で発見されたのは、つい先週の事だ。「異臭がする」という隣に住んでいる主婦からの通報で駆けつけた警察が見たのは、腐って動かなくなった清次郎の肉体だった。他の部屋からは両親のものらしい白骨死体も見つかった。

餓死だったらしい。両親が死んだ引きこもりの清次郎は、食べるものが尽きても外へ出られず、ただただ家の中で激しい飢えに苦しみながら死を待っていたようだった。

しかし、ここで誰もが首をかしげる事実が一つあった。両親が死んだのは少なくとも一年近く前で、家の食料は遅くともその一週間後には尽きていたはずだった。それなのに、清次郎はどうやって一年近くも生きていたのか。この不気味すぎる謎は話題を呼び、テレビでも面白おかしく報道された。

誰もが殺した両親の屍肉を食べていたんだと考えた。確かに、清次郎はそれを食べていたのかもしれない。でも、それだけで一年近くもいきのびるはずは無い。誰でも分かることだ。

僕はその答えを知っている。そう、あなたに話したとおり、清次郎は米を食べていた。死んだ両親の肉体から生えた稲から取れる米を食べて、清次郎はそれまで生きのびていたんだ。

じゃあ、いったいなぜ清次郎は餓死したのか。つまり、なぜ両親の体から米を取ることができなくなったのか。あなたは疑問に思うだろう。

答えはきっと簡単だ。清次郎は、米ばかりの生活に耐えられなくなり、とうとう両親の肉を食べてしまった。貴重な米が生えてくる肉を、跡形も無く食い尽くしてしまった。両親の骨の一部には、肉が少しこびりついていて、そこには清次郎の歯形がついていたらしい。

そして清次郎は死んだ。

これは僕が人から聞いた噂と、ニュースからの推測だ。清次郎が何を考え、どんなふうで死んだかは実は誰にも分からない。誰にも……………。

いや、そうじゃないかもしれない。

清次郎は、両親を殺してから今日まで一年間、不定期ではあるけど継続的に、ずっと僕にメールを送りつづけてきた。僕はもう、気持ち悪くて恐ろしくて、そのメールを決して開かなかった。

でも、もし僕がそのたまりにたまったメールを開いたなら、清次郎の死の真相が明らかになるかもしれない……………。

でも、僕にはそれができない。だってあなたにも分かるだろ。そんな恐ろしいメール、誰が読もうという気になるんだ。

この話はこれで終りじゃない。最後に、僕を恐怖のどん底に突き落とすような出来事があった。

昨日、清次郎からメールが届いた。昨日だ。

これをあなたに話している今も震えが止まらない。これがメールの送信におけるトラブルなのか、それとも死んだ清次郎が僕に何かメッセージを送ってきたのか、僕には分からない。僕は清次郎の死霊に取り付かれたのだろうか。

怖い。

恐くて耐えられない。僕はあなたに助けて欲しいんだ。僕のことを助けて欲しい。僕の所へ来て、僕の代わりにこのメールを読んで欲しい。いや、でも、そこまでしなくてもいいんだ……………。

あなたのメールアドレスを教えて欲しい。そうしたら、僕はあなたにこのメールを、清次郎から昨日届いたメールを、そして、今まで清次郎が僕に送りつづけてきたメールを、両親を殺した

時に清次郎が送ってきた写真を、あなたに全部送るよ。

僕のメールアドレスをあなたに教える。だから、あなたはそこにメールを送ってきてくれたらいいよ。

それじゃあ、これが僕のアドレスだ。僕はあなたを待ってる。ずっと待ってる。たとえあなたが僕のことを忘れても、僕はあなたのことを忘れない。ずっと、あなたからのメールを待ち続けている.....

kiyojiro@xxx.com